

これまでのキャリアとこれから

折原 隼一郎 (東京医科大学 医療データサイエンス分野)

私が「計量生物学」を認識したのは、恐らく 2017 年 4 月、製薬企業に入社した時でした。

私は学部・修士のときは数理統計学分野に近い研究室に在籍しており、数式を追う日々を過ごしておりました。学部 3 年生のときに受講したデータ解析の実習や数理統計学の授業が大変面白く、複雑な事象を比較的単純な統計モデルで近似・解釈しようとする試みに、統計学の面白さを初めて見出したことを今でもよく覚えています。

修了後は、前述の通り製薬企業で新薬開発業務に従事しました。修士までの環境とは大きく変わり、多数の人物が関わる臨床試験での業務に最初は大きく戸惑ったのを今でもよく覚えています。また統計解析だけではなく、治験ではデータの品質管理が特に重要であり、CRF 作成・データ仕様書の作成などの業務の重要性を知ることができました。

以上のように学生から社会人にかけて、直接的・間接的に計量生物学に関わる勉強・業務に従事してきましたが、重要なことは主体的にその環境で全力を尽くすことだと考えています。そのために不可欠なことは、主に 2 つあると個人的には感じております。

1 つめは、勉強・仕事内容に興味を持つことではないかと思います。私の場合、学生の頃は自身のバックグラウンドもあり、データの収集方法やデータ仕様の検討に関心を持ったことはなく、就職してから間もなくも何のために統計解析担当者が参画するのかが分からずにいました。しかし、それらの仕様次第で続く統計解析の難易度が格段に変わることを体感し、主体的に参画することの重要性を感じました。この事例はどちらかと言うと必要に差し迫ったから、という傾向が強いですが、言いたいことは興味を持って主体的に取り組むことで多くのことを経験でき、自分の今後の糧にできるチャンスが広がるのではないかと思います。自分が興味を持って取り組めることに対しては当前ですが、何事にも興味を持つように努力することも重要ではないかと思います。

2 つめは、その環境で師事したい人物を見つけることなのではないかと思います。もちろん、全てをその人物に近づけようとするのは無理ですしその必要はないと思いますが、その人を尊敬し少しでも近づきたいと思うことは、自身を駆り立てる重要な要素の一つになると考えております。私は幸いなことに、自身が経験した多くの環境で、そういった方に巡り合うことができました。例えば、私の博士課程の指導教官であった、田栗正隆先生がその一人です。前述の通り、私は修士課程まで数理統計学系の研究室に在籍していたこともあり、理論的な結論を導くための数学的な条件に、大きな意味を見出さずにいました。博士論文の一つになっている研究でも同様に考えていたのですが、田栗先生から「その条件の実用上の意味合いをどう考えるのか」、そして「現実的に成立可能なのか」というコメントをもらいました。おそらく、このときはじめて理論的な仮定を、実用上の制約条件と対応させて考えることができました。こういった視点を持てる研究者になりたい、と強く考えさせられるイベントの一つになりました。

今回の執筆のお話をいただいた際に、私のような生物統計家としても、研究者としても志半ばな人間が何を書けば良いのか、正直とても悩みました。事実、バックナンバーを見ると、実績十分な生物統計家・研究者の皆さまの名前が並び、大変恐れ多い気持ちです。そこで、自分の特徴として企業の経験も交えつ

つ、自身よりも若い研究者・生物統計家の皆さまに向けて、自身の経験を踏まえて、どういうことを考えながらキャリアを歩んできたのかを記載させていただきました。何かしらの糧になってくれると大変幸いです。

最後に、このような執筆の機会をいただいたことに深く感謝いたします。まだ Ph.D を取得してから日が浅く様々なことが勉強の毎日ですが、今後も精進していき、自分のバックグラウンドを活かして、理論と応用の架け橋となるような研究者になっていきたいと強く考えております。そして、今後は自分自身が多少なりとも何かしらのかたちで「計量生物学」に貢献できるような人物になっていきたいと考えております。